

## ハワイのなりたち

丸川 知雄

マルクス曰く、人間がふれる自然とは実は「人間化された自然」であり、「自然は人間の制作物」でさえある〔『経済学・哲学草稿』〕。もっとも、マルクスがハワイ島を訪れていたら少し考えが変わっていたかもしれない。地中から吹き出たマグマが固まったばかりのようなハワイ島の荒々しい風景を見たら、自然を人間化する人間の力にも限界があることを悟らざるをえない。ハワイ諸島に初めて人間が上陸したのは紀元三〜八世紀頃と推定されているが、その人々が最初に見たのもこの荒々しい不毛の光景だったに違いない。

ポリネシアの人々がハワイ諸島を発見してから数百年の間、ハワイは不毛の火山島のままであったが、西暦一〇〇〇年頃にポリネシアの島々で高まった人口圧力に押し出されてタヒチからハワイに大規模な移住が行われた。最も近い島からでも二〇〇〇キロは離れているハワイに、動力も羅針盤も持たないポリネシア人たちがどのように渡ったのか謎とされていたが、星の位置を目印として、潮流、鳥や浮遊物なども観察しながらポリネシア人たちは遠い海を渡ってきたのだろうと考えられている。一九七六年にはポリネシ

ア人の乗った帆付きのカヌーを再現した「ホクレア号」が建造され、ミクロネシアの航海師の導きによって近代的な航海用具を使わずにハワイからタヒチに無事渡ることに成功した（池澤夏樹『ハワイイ紀行』新潮社、一九九六年）。

タヒチからの移住者たちはハワイに定住するために必要なさまざまなものをカヌーに積み込んできた。すなわち、タロイモ、椰子、バナナ、パンの実、豚、鶏、犬などである。太平洋の真ん中に鋭く突き出たハワイ諸島は農業を営むには絶好の環境であった。湿った

暖かい空気は沿岸部を通り過ぎて高い山に引っかけり、そこに大量の雨をもたらす。その結果、同じハワイ島でも山地の熱帯雨林には年間四六〇〇ミリの雨が降るが、海岸の乾燥地帯には年間二〇〇ミリしか降らない。実際、私がハワイ島にいた数日間も海岸はずっと天気よかったが、山にはいつても厚い雲がかかっていた。山に降った雨は地下水となってふもとに流れてくるので、ふもとでは豊富な日光を浴びながらも、渇水や洪水に悩まされることなく、いつでも水が得られる。入植したポリネシア人たちによってハワイ諸島の自然は「人間化」され、豊かな実りの島に作り替えられていった。椰子の木がそよぐ白い砂浜というハワイのイメージは、実はハワイでの人間の長い営みの中で作られた風景である。ハワイの運命は一七七八年のクック船長による「発見」で大きく変わる。イギリス人がもたらした武器を利用し

たカメハメハ一世によってハワイ諸島は初めて統一され、ハワイ王国が成立する。ハワイに福音をもたらすべく欧米から会衆派の宣教師たちが移住してくるが、定住した欧米人たちはハワイ王国のもとでアメリカやイギリスの支援を受けながら政治的・経済的な勢力を拡大し、ついにはハワイをアメリカへの併合へ導いていった。

一九世紀以来、欧米人たちはハワイを様々な形で利用するようになった。まず、一九世紀初頭にハワイは太平洋を渡って中国やアジアに向かう欧米の貿易船の補給基地として使われるようになり、続いて欧米の貿易船は中国で珍重される白檀の木を買い取っていくようになった。ところが、白檀の木を伐採する重労働を嫌ったハワイ人たちは白檀の幼木まで引き抜いてしまったので、二〇年もすると白檀の資源は枯渇してしました (Phil Barnes, *A Concise History of the Hawaiian*

Islands, Petroglyph Press, 2009)。

一八二〇年代にハワイは捕鯨船の補給基地として使われたが、アメリカ本土で石油が発見されると、ランプの燃料は鯨油から石油に取って代わられるようになり、捕鯨はすたれていった。

ハワイに宣教師などとして移り住んできた欧米人たちが、ハワイの次なる産業として着目したのがさとうきび栽培である。一八四八年に国王カメハメハ三世が欧米人にも土地の保有を認めると、欧米人たちはさとうきびプランテーションを始めるために土地を買いあさり、三〇年後にはハワイの土地の八割が欧米人によって買い占められるに至った。プランテーションの労働力として最初に期待されたのはハワイ人たちであったが、自給自足の生活に満足していたハワイ人たちはプランテーションでの長時間のきつい労働に従事しようとはしなかった。そこで次に中国人たちがプランテーションの労働力

として導入された。しかし、中国人たちもきつくて賃金の安い労働に長く従事することはなく、五年の契約期間が終わったら国に帰るか、またはホノルルに移り住んでそこで商売に従事するようになった。一九世紀末頃には中国人たちはハワイでその商才を存分に開花させた。こんにちハワイの不動産開発はそのほとんどが「フイ (Hu'i)」によって行われているという (Barnes、前掲書) が、これは明らかに中国語の「合」から来ており、中国系の投資家たちを意味している。

労働力に困ったさとうきび産業に次に導入されたのが日本人労働力である。一八八五年に最初の「官約移民」(政府間契約による移民) がやってきてから、のべ一八万人もの日本人が三年契約の労働者としてハワイに渡った。ポルトガル人や中国人も働いていたプランテーションで日本人は最も低い賃金を与えられ、名前ではなく番号で呼

ばれるなど非人間的な扱いを受けたが、日本人はその勤勉さを評価され、プランテーションの労働力の主力となる。日本人たちは契約期間にしっかり稼いで日本に帰るつもりであったが、低賃金のため十分に稼ぐことができなかったので、多くは「写真花嫁」(写真の交換による見合いによって日本から結婚相手呼び寄せること) を呼び寄せ、ハワイに定住する道を選んだ。

さすがの忍耐強い日本人たちといえどもプランテーションでの低賃金で苛酷な労働に長く従事することはできず、契約期間が終わるとさとうきびプランテーションを離れていった。日本人の一部が新たな活路として見いだしたのがコーヒー栽培である。ハワイ島コナ地区ではもともと欧米人がコーヒーのプランテーションを営んでいたが、一八九九年の世界コーヒー不況によってプランテーションは解体し、ハワイのコーヒー産業の主たる担い手は日系人

の経営する小規模な農園に変わった (Kona Coffee Cultural Festival website による)。コナ地区の土地の大部分はカメハメハ一世のひ孫にあたるバーニス・パウアヒの遺言によって設立されたカメハメハ・スクールズ・ビショップ財団<sup>2)</sup>によって保有されており、それが一区画三ヘクタールほどに小分けされて六〇〇軒のコーヒー農家に貸し出されている。日系農家の手でコナはアメリカ国内の唯一のコーヒー栽培地として成長し、コナ・コーヒーは高級なコーヒーに育て上げられていく。

ブラジルでも感じたことであるが、様々な国からの移民が集まる場所では、それぞれの国の比較優位とは異なる各民族の生身の人間としての比較優位が発揮されているように思う。ブラジルで商業の才能を発揮したのはオスマン朝トルコから来たシリアやレバノンの人々であった。日本人はハワイと

パリー・アイケングリーン

小浜裕久 監訳  
浅沼信爾 解題

## とてつもない 特権

君臨する基軸通貨ドル  
の不安

ユーロ危機、国際通貨を  
目指す人民元に立ち向かうドル。  
2940円

ニール・ファーガソン  
仙名 紀 訳

## 文明



競争・科学・所有権・医学・消費・  
労働に西洋の強さを見出し、中国  
台頭も論じる。 3465円

原田國男 ▶好評発売中4刷

## 逆転 無罪の 事実認定

20件以上逆転無罪を言い渡した元  
判事が自ら事件を語る。 2940円

高木慶子 編著 ▶好評2刷

## グリーンケア入門

悲嘆のさなかにある人を支える  
寄り添い、極すために。 2520円

\*価格税込

勁草書房 TEL 03-3814-6861  
FAX 03-3814-6854

〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1  
http://www.keisoshobo.co.jp

ただ、お茶の場合には、先端の葉や茎により分けた後で再びブレンドするので、より低級とされる茎などの部分もいわず敗者復活の道が残されているのだが、コーヒーの場合にははじかれた不完全な豆や大きさが合わない豆はそのままB級品としての道をたどることになる。訪れた農園での説明によれば、B級品は外国のコーヒー豆と混ぜられて「10%コナ・コーヒー・ブレンド」になるとのこと。実はハワイのスーパーや空港でコナ・コーヒーとして売られているものの多くがこの「10%コナ・コーヒー・ブレンド」であ

る。これまで私はコナ・ブレンドを飲んで、そこに一割含まれるという神秘のコナ・コーヒーの味を見分けようとしていたが、それは要するに不完全な豆としてはじかれたコナ・コーヒーの味だったわけである。

注

(1) なお池澤夏樹氏が『ハワイ紀行』(新潮社、一九九六年)で書いているように、また現地ではレヒビなどを聞いているとわかるようにこの地域の正しい呼び方は「ハワイ」である。ただ、日本語のなかで現地での読み方と違う地名が定着している例は枚挙にいとまがないので、ここでは日本語での慣例に従って「ハワイ」と呼ぶことにする。

(2) パーニス・パウアヒの遺産がもたらしたもう一つ重要なものがホノルルにあるピショップ博物館である。実は本稿に書いたことの多くを私はこの博物館で学んだ。

(まるかわ・ともお) 東京大学社会科学研究所教授



写真1 コーヒーの樹に実る豆

は逆に最初はコーヒープランテーションの労働力として導入されたが、やはり低賃金と苛酷な労働に耐えかねてプランテーションを離れ、自作農として野菜、果物、茶の栽培に才覚を発揮するようになった。ハワイを見ても、ブラジルを見ても、日本人は集約的な農業に比較優位を持っているように思われる。

ハワイ島のコナで車を借りてコーヒ



写真2 重力を使ったコーヒー豆選別機

農園を見学した。溶岩が固まったばかりのように見える荒涼とした海岸地区から山の方へ車を走らせるとたちまち標高が高まり、緑がだんだん深くなっていく。うねった道をさらに登っていくと濃い霧が立ちこめ、ところどころでは視界が数メートルぐらいしかなくなり、雨もばらっついていく。ハワイ島の山にひっかかっている雲に入ったのだとわかる。霧の中の運転の末にた

どり着いた農園はうっそうとした密林のなかにあった。

コーヒー農園では樹に実る豆のうち赤くなっただけを収穫する(写真1)。豆はいっぺんに赤くなるわけではないので、収穫を機械化することが難しい。収穫された豆は発酵し始めるので、水洗することで発酵を止め、パルパーという機械にかけて赤い外皮を除く。残った豆を一晚コーヒー豆から出る汁につけて発酵させ、それを洗うと内皮も取り除くことができる。むき出しになった豆を乾燥させると緑色があったコーヒー豆となり、後は焙煎するばかりとなるが、私が訪れた農園では緑色の豆の選別を厳格に行っていることを特に強調していた。豆を大きさによって選別し、さらに重力を使って中身がしっかり入った豆と、不完全な豆とをより分けている(写真2)。重力でより分けるというのは前回この欄で紹介したお茶の選別法と似ている。